

# 「日本初」の 灯台を巡る旅

取材・文

島田春花

協力

山本詔一(横須賀開国史研究会会長) | 松田睦夫(志賀町教育委員会)  
伊藤大輔(大関株式会社)

日本の海を見守る灯台の数は、令和7(2025)年現在およそ3000基。日本全国に点在する灯台の歴史は、江戸時代までさかのぼる。慶長13(1608)年、石川県の福浦港に建てられた石造りの小屋が、灯台の始まりといわれている。小さな小屋から始まった日本の灯台は、建造された時代や場所によって、大きさや様式、材質もさまざまだ。「日本初」をキーワードに、日本における灯台の歴史をひもといてみよう。

## 日本の洋式灯台の始まり「観音埼灯台」

ウェブサイトなどで「日本初」として数多く紹介されている灯台は、神奈川県横須賀市・浦賀水道に臨む<sup>かんのんさき</sup>観音埼灯台だろう。観音埼灯台は、「日本初の洋式灯台」である。海の青と木々の緑に映える真っ白なボディのてっぺんには、風見鶏が取り付けられている。明治2(1869)年の点灯以来、現役の航路標識として活躍を続けている。

観音埼灯台は、横須賀製鉄所の首長を務めていたフランス人造船技師のフランソワ・ヴェルニーによって建造された。地震による倒壊のため、現存の観音埼灯台は3代目にあたる。初代の観音埼灯台には、横須賀製鉄所で焼き上げられたレンガが使用されていた。「当時の日本にはレンガを焼く技術がなかったため、ヴェルニーたちフランス人技師の指導の下、日本の瓦職人が灯台建造のためにレンガを焼いたのです」と、横須賀開国史研究会会長の山本詔一<sup>しょういち</sup>さんは言う。

灯台の明かりを船に届けるためのフレネルレンズが導入されたのも、日本では観音埼灯台が初めてだ。観音埼灯台が見下ろす浦賀水道は潮の流れが速く、近隣の東京や横浜とは気候も若干異なる。



白亜の観音埼灯台。京浜急行電鉄浦賀駅あるいは、JR横須賀駅よりバス。観音埼下車徒歩10分。

山本さんによると、観音埼灯台は、気象データを収集する役割も担っていたという。

観音埼灯台は、日本に16基ある「のぼれる灯台」の一つだ。踊り場まで登ってみれば、東京湾や対岸の房総半島を見渡せる絶景が待っている。

## 日本最古の木造灯台「旧福浦灯台」

実は、灯台という役割に目を向けると、他にも「日本初」が見えてくる。江戸時代に造られた灯明台である。石川県羽咋郡志賀町の福浦港にたたずむ旧福浦灯台は、日本に現存する「最古の木造灯台」だ。白い木板の外壁と、漆黒の瓦屋根のコントラストが美しい。

志賀町教育委員会の松田睦夫さんによると、慶長13（1608）年の建造から新たな灯台が点灯する昭和25（1950）年まで旧福浦灯台を管理したのは、福浦住民の日野家という一族だったそうだ。日本の灯台の始まりと伝えられる、旧福浦灯台の前身の灯明台を建てたのも日野家だという。

灯明台とは、石造りの小屋で火をたく和式灯台のこと。公益社団法人燈光会によると、江戸時代に造られた灯明台は100基以上もあったという。

もっとも、旧福浦灯台の前身といえる灯明台は、その存在は伝えられているものの姿形はなく、「どこにあったのか」もよくわかっていない。旧福浦灯台が建つ日和山（船乗りたちが天候を判断するために登った山）は、風が強く足場がでこぼこしている。灯明台があった場所について、「もっと平らで海風が当たりにくい場所に建てられていたのではないかと松田さんは語る。旧福浦灯台を訪れた際には、“始まりの灯明台”が建てられていた場所を想像するのも楽しいだろう。

旧福浦灯台は、すでに灯台としての役目を終えている。しかし、令和6（2024）年に発生した能登半島地震にも負けず、建造当時の姿のまま今も能登の海を見守っている。現在は、夜間にライトアップが行われるなど、志賀町の観光名所としての新たな“航海”をスタートさせている。

左 / 旧福浦灯台と「日本の灯台が始まった地」と示された石碑。福浦バス停から徒歩5分。右 / 市街地にたたずむ今津灯台。阪神久寿川駅から徒歩15分。



## 現役最古の木造灯台「今津灯台」

現役という視点に立つと、また新たな「日本初」の灯台が見えてくる。兵庫県西宮市に建つ今津灯台（正式名称：大関酒造今津灯台）は、文化7（1810）年の建造から今もなお航路標識として活躍する、現役の日本最古の木造灯台だ。黒い木板に薄緑の屋根が特徴的で、明かりをとる部分には格子が組まれている。今津灯台は、大阪から東京へと清酒を運ぶ樽廻船や漁船の安全を願って、大関株式会社の創業家である長部家5代目・大坂屋長兵衛が私費で建造したものだ。

「大坂屋／大関酒造」を前身とする大関株式会社の伊藤大輔さんによると、文化7（1810）年の創建から大正の初めまで、大坂屋で働く丁稚が朝晩欠かさず灯台の火をたいていたという。雨の日も雪の日も灯台に火をともし続けた丁稚の働きは、当時丁稚を務めていた劇作家・食満南北が「今津の常夜灯」として残している。やがて、清酒の輸送は樽廻船から蒸気船へと移り変わるが、今津灯台は今も変わらず大阪湾を見守り続けている。

令和5（2023）年、津波対策の一環として、今津灯台は対岸に移設された。移設先には「今津べにかんざくら」の幼木が西宮市政100周年記念樹として植えられた。200年以上の時を超えて愛される今津灯台は、これからも西宮市のシンボルであり続ける。

灯台の歴史は長い。さまざまな視点から「日本初」を探っていくと、灯台のみならずその地域の過去・現在・未来が見えてくる。全国に3000基ある灯台には、知られざる「日本初」がまだ眠っているかもしれない。

